

第七十五回佛教史學會學術大会

研究報告要旨

開催日
会場

二〇二五年十一月一日（土）
龍谷大学 大宮学舎

第七十五回佛教史學會學術大会開催日程

日 時…二〇二五年十一月一日（土） 午前十時～午後五時
会 場…龍谷大学 大宮学舎 東覺

午前の部（午前十時～十二時）

■東洋部会 研究報告 於 東覺三〇三

近世北部ベトナムにおける祖先祭祀の変遷―懺悔札から家札へ―
東北亜歴史財団 趙 浩衍

〈悲華經〉に見られる菩薩による仏国土の選択
龍谷大学 壬生 泰紀

後周における「廃仏」と禅宗―特に仏像毀損の思想的背景について

甲南大学 新見 まどか

■日本部会 研究報告 於 東覺二〇一

絶海中津の在明期間の軌跡について
東洋大学大学院 崇 晃（張 戦勝）

諸国講師任用制度に関する基礎的考察
大阪公立大学大学院 中納 雅司

演説から講演へ―近代における仏教研究と博士号に着目して―

武蔵野大学仏教文化研究所 武井 謙悟

午後の部（午後一時～五時）

■合同部会 研究報告 於 東覺一〇一
真言宗の法会と行列

種智院大学 西 弥生

クチャの石窟寺院に見られる「涅槃空間」の再考

—「聖地の再生産」の観点から—

東洋大学 檜山 智美

村上勘兵衛文書に見る仏書出版の諸相

京都先端科学大学 金子 貴昭

仏塔における「古典」意識—遼金塔にみる模すべき塔のありかた—

金沢大学 水野 さや

近世北部ベトナムにおける祖先祭祀の変遷

―懺悔礼から家礼へ―

東北亜歴史財団 趙 浩衍

本発表は、儒学的素養を身につけていく過程において、宗族で行われていた仏教式の祖先祭祀がいかに評価され、どのように変容したかを、旧河内省青威県周舎村（現在ハノイ（Hà Nội）市フウホア（Hữu Hòa）社の一部）段族の事例を通じて分析するものである。一八世紀において、段族は黎朝において実権を握っていた鄭王に仕える宦官及び命婦・下級官吏を通じて、村落内で有力な地位を築いていた。一八世紀後半から始まった段族の祖先祭祀儀礼は宦官であった段廷金（第八代祖）が定めた「合祀の礼」に由来する。この「合祀の礼」は、四月一日と七月一日に行う懺悔礼、および一二月三日に行う臘祭から成り立っており、すべて仏教儀礼に基づいていた。祭祀の日に掲げる「大帳」には祖霊の諡号が記されており、懺悔礼での祖霊供養に用いら

れていた。一八世紀後半になると、生徒や秀林局、課生といった低位の儒学者が登場するようになり、明命一二年（一八三一）にはじめて段仲暄（第一一代祖）が郷試に合格したことで、周舍村（さらに青威県）を代表する士大夫の家へと変貌を遂げた。仲暄は、従来の「合祀の礼」に加えて「家礼」に基づく立春祭や冬至祭を設けた。また、臘祭の儀礼方法も懺悔礼から立春礼に変更した。二〇世紀初頭に四月一五日の懺悔礼が儀式から排除されたが、七月一五日の懺悔礼のみはずっと残されていた。本発表では、家譜と文集の文献史料と発表者が現地で収集した碑文・証言などの資料を総合的に検討し、その変遷の過程と儒学者の苦悩、「懺悔礼」が存続し続けた理由について考察する。

〈悲華經〉に見られる菩薩による仏国土の選択

龍谷大学 壬生 泰紀

〈悲華經〉は四世紀頃に成立したとされる大乘經典であり、全六章（梵文）で構成されている。その第三章以降では、釈迦如来の本生譚や八〇年の生涯を軸に物語が進んでいくため、仏伝という性格を有している。また、中核をなす第四章では、阿弥陀、觀世音、得大勢、文殊師利、普賢、阿閼といった著名な仏・菩薩の浄土思想に言及しながらも、最終的に穢土である娑婆世界で成仏し、衆生救済を決意する宝海梵志（釈尊の本生）を「大悲をもつもの」として称讃し、釈迦を諸仏中最上の存在として位置づけている。このような性格から本經典は浄土經典と密接な関連を有する經典ともいえる。

さて、第三章においては、釈迦の本生である宝海梵志、ならびに阿弥陀、觀世音、得大勢の本生である王や王子たちが、将来建立する仏国土を選択する場面が描かれている。ここでは、宝海梵志は穢土を、王や王子たちは浄土を選択する構図になっており、さらに、その選択に至

る過程についても詳しく述べられている。このような記述は、管見の限り、先行する浄土経典には見られず、菩薩が仏国土をいかに選択するのかを明かす貴重な資料といえる。

そこで本発表では、〈悲華經〉第三章にみられる菩薩たちの仏国土の選択に注目し、これまで浄土経典では不明瞭であった「菩薩が仏国土を選択し、自身の世界を建立する過程」の一つのモデルケースを提示したい。

後周における「廃仏」と禪宗

——特に仏像毀損の思想的背景について

甲南大学 新見 まどか

五代十国期は、林立した諸政権の多くにおいて、仏教が盛んに信仰された時代であった。その中で、異色なのが後周（九五―九六〇）である。この王朝は、所謂「三武一宗の法難」の最後の「一宗」、すなわち世宗柴榮（在位：九五四―九五九。以下、呼称は柴榮に統一する）による「廃仏」が行われたことで知られる。

ただし柴榮の「廃仏」については、これ以前の「三武」（北魏の太武帝、北周の武帝、唐の武宗）との相違も指摘されている。三武の場合、外来宗教である仏教に対する排斥が意図されており、儒教や道教から仏教に向けた攻撃が顕著に見られた。これに対し、柴榮の背後には儒教や道教側の働きかけが殆ど確認できず、むしろ仏教界の整理や管理強化、或いは経済政策の面が強かった。そのため、柴榮の仏教政策は「国家としての仏教管理政策の厳正化」であって「廃仏」とは見做

せない、との立場が現在の主流である。

確かに後周が行った仏教政策は、先行する五代諸王朝においても類例があり、ことさら「廃仏」として取り上げるべきではないようにも思える。しかし史料や先行研究を精査すると、同時代の諸政権と後周との決定的な相違点として、仏像に対する毀損の問題が浮かび上がってくる。しかもその思想的背景を探ると、儒教でも道教でもなく仏教そのものの、就中、唐代禅宗の影響が窺われる。

そこで本発表では、まず仏教と五代十国諸政権との関係を踏まえ、仏教的観点から見た後周の立ち位置を確認する。そのうえで、後周政権と繋がりを持った僧侶を三人取り上げてその特徴を分析し、唐代禅宗の仏像観が柴榮と結び付く様態を明らかにしたい。以上の作業によって、後周の「廃仏」に、禅宗史という全く新しい方向から光を当て、その歴史的位置付けを見直すことが出来るであろう。

絶海中津の在明期間の軌跡について

東洋大学大学院 崇 昊（張 戦勝）

絶海中津（一三三四・四〇五）は臨済宗夢窓派（開祖は夢窓疎石、一二七五・一三五一）の禅僧で、別号を蕉堅道人という。彼が洪武元年（一三六八）に明朝へ留学した事蹟は広く認められている事実である。明朝滞在中、絶海は季潭宗泐（一三一八・一三九一）と親密な交流を持ち、洪武九年（一三七六）には明太祖（朱元璋、一三六八・一三九八在位）により当時の国都である南京の「英武楼」に招かれたこともある。絶海は五山禅僧を代表する存在であり、特に皇帝とも直接的な交流を持った。そのため、在明期間中の活動を比較的好く知ることができる。この時期の五山禅僧の明朝における活動の一端を絶海から窺いうるという点は重要である。

絶海には『仏智広照浄印翊聖国師年譜』および『勝定国師年譜』二種の年譜が存在するものの、在明中の活動についての記載は極めて少ない。従って、その行跡と交流を探るには、彼の詩文集『蕉堅藁』によって補う必要がある。『蕉堅藁』には、絶海が明朝滞在中および帰国後に書いた詩

が収められており、彼の思想や交友関係を理解するための重要な資料と言える。『蕉堅藁』は五山文学史上、非常に高く評価されており、義堂周信（一三二五・一三八八）の『空華集』とともに五山文学の双璧と称されている。また、『蕉堅藁』の訳本としては、①入矢義高『五山文学集』岩波書店、一九九〇年、②梶谷宗忍『蕉堅藁・年譜』相国寺、一九七五年、③蔭木英雄『蕉堅藁全注』清文堂、一九九八年などがある。本研究では、入矢氏による『五山文学集』を底本として利用する。

絶海中津の在明時期の軌跡に関する研究は、彼が五山禅僧としてどのように明朝の仏教界で活動し、思想や文学を発展させたのかを説明する上で不可欠である。特に、宗泐との親交や明太祖との接触は、彼の思想形成における重要な転機であり、それらは日明交流の具体的な実態を示す貴重な事例である。絶海が明朝滞在中に詠んだ詩文は、彼がどのように明代仏教から影響を受け、それを日本に持ち帰り再解釈したのかを明らかにする手がかりとなる。このように、絶海の軌跡を考察することは、彼の思想的・文学的貢献の再評価のみならず、日明の仏教的交流の本質をより深く理解するための重要な視点を提示する。

本研究は、『蕉堅藁』に収められている詩、彼の弟子が編纂した『仏智広照浄印翊聖国師年譜』および『勝定国師年譜』などを通して、絶海中津の明朝滞在中の軌跡を明らかにしようするものである。

諸国講読師任用制度に関する基礎的考察

大阪公立大学大学院 中納 雅司

日本の古代国家は、大宝二年（七〇二）以来令制国単位に地方僧官（国師）を派遣していた。国師は延暦一四年（七九五）に講師と改称され、天長二年（八二五）には読師が設置され、諸国講読師制度が確立する。

彼らは令制国単位での僧侶の教導や寺院資財の管理等を担っており、その点で地方仏教政策を中心的に担う重要な存在である。また、その出身母体は中央諸大寺で育成された学僧である以上、任用制度は中央で育成されたエリート僧を選抜することを意味する。よって、地方僧官、特に関連史料が比較的豊富にある諸国講読師の任用制度を分析すれば、中央の仏教政策と地方での仏教政策の相互関係を分析し得ると考える。これは日本の古代国家の仏教政策の特徴を考える上で重要である。

しかし、先行研究では部分的に任用制度が分析されているが、延喜式や類聚三代格等の法制史料に関する具体的な分析は不十分である。加えて、諸国講読師の任用制度の中心である階業

（試業、複試、立義、夏講、供講）についても定説がなく、論者によって理解に差があるのが現状である。そこで本稿では延喜式や類聚三代格等の法制史料に見える諸国講読師の任用制度を改めて考えてみたい。

第一章では延喜式にみえる諸国講読師任用制度について、その外の史料も踏まえながら基礎的事項を確認する。具体的には僧綱・玄蕃寮・治部省の関わりや国分寺安居に関する規定に注目する。

第二章では、階業（試業、複試、立義、夏講、供講）について、類聚三代格等の法制史料を分析する。そして、階業が国分寺安居と密接な関わりをもつことを確認する

第三章では、九世紀における諸国講読師任用制度の展開過程を分析する。具体的には出身の諸大寺間での諸国講読師職の得分化と僧綱・玄蕃寮・治部省の関わりに注目する。

以上より、諸国講読師制度の特質（第一・二章）と展開（第三章）を分析することで日本古代における仏教政策の特徴について聊か考えてみたい。

演説から講演へ ―近代における仏教研究と博士号に着目して―

武蔵野大学仏教文化研究所 武井 謙悟

明治期に、「多くの人の前で自分の主義、主張や意見を述べる」とを意味する speech の翻訳語として「演説」が用いられた。演説は自由民権運動などで行われ、仏教界でも「仏教演説」として各地で実施された。仏教演説に関する研究では、『明教新誌』や『仏教演説集誌』における演説内容の掲載や演説指南書の刊行から明治一〇～二〇年代に活発に行われていた点などが指摘されてきた。

この仏教演説に対して、『通俗仏教新聞』の主筆・高田道見は興味深い意見を述べている。一九〇四（明治三七）年四月八日、大日本仏教青年会主催の降誕会に際し、井上田了・村上専精・井上哲次郎の博士三名を含む六名の演説会が実施された。博士のうち、寺院出身である井上田了・村上専精は釈迦に対して尊敬の態度を持っており「仏飯を喫した人だけに、聴衆を感動させた」一方で、井上哲次郎は「仏前に一礼しない」態度が不評だったという。しかし、彼

の『釈迦牟尼伝』（文明堂、一九〇二）は売れ行きがよく、高田は「博士崇拜の世の中」と評している。

ここで注目されている「博士」は、一定水準の学問を修めた人物に対し文部省が授与する資格であり、一八八七（明治二〇）年の学位令により制定された。仏教関係者では一八八八（明治二一）年六月七日に南条文雄、一八九六（明治二九）年六月八日に井上円了が文学博士を授与されている。

本発表は、博士号に関する法令、仏教に関する博士号取得者を整理した上で、博士と仏教の関係を考察する。とくに都市や地方で仏教に関する話をする際に博士が招待され、「講演」の言葉が用いられていた点に着目する。

これまでの研究で博士は学問の形成や学派といった観点から注目されてきた。本発表では現代の「市民講座」にもつながる「多くの人に向かって仏教について話すこと」が、仏教者の演説から学者の講演に変遷していく過程を博士との関連から論じてみたい。

真言宗の法会と行列

種智院大学 西 弥生

行列に関しては特に近世史の分野において研究が蓄積されてきており、大名行列や朝鮮通信使・琉球国王の使節の行列、オランダ商館長の行列、都市祭礼行列などが注目され、しばしば展示なども行われてきたが、仏教の行道は寺院境内の外に出ないという理由により研究対象から外されてきた。しかしながら、仏教に基づく修行や法会においても様々な行道・行列が行われてきたことをふまえれば、行列研究の対象に含める意義があるのではないかと考える。そこで本報告では、一例として真言宗の中核的寺院である東寺が行道・行列をどのように活用して社会と関わりをもち、存続と発展を図ってきたのかを考察する。

第一章では、『日本霊異記』や『栄花物語』といった説話や物語の中に語られる行道の事例に注目し、観衆に見せることを前提として行われた行道とそうでないものがあることを概観する。また、真言宗の行列研究はこれまで体系化されていないが、歴史学や美術史の分野における先行研究のいくつかを紹介する。

第二章では、絵巻に描かれた東寺の灌頂と行道に注目する。東寺所蔵の絵巻『弘法大師行状絵』には東寺を舞台とする灌頂に関する段があり、実恵から真紹に授けられた灌頂における行道および、灌頂の道場における大師影現の場面が絵面化されている。なぜ本段にこのような場面が描かれる必要があったのか、東寺流の発展過程をふまえて考察する。

第三章では、東寺長者の拝堂儀礼に伴う行列について、特に近世の実態に着目する。東寺の周辺を巡るこの行列が行われた背景には、真言密教の庶民化や様々な行列文化の成熟、東寺と庶民との関係性があったことを論じるとともに、臨期応変の列の組み替えがしばしば問題となっていたことを指摘する。

以上のような流れで、真言宗の行道・行列研究の可能性に目を向けることとしたい。

クチャの石窟寺院に見られる「涅槃空間」の再考

―「聖地の再生産」の観点から―

東洋大学 檜山 智美

かつてシルクロードの東西交通の要所であった亀茲（クチャ）国では、多くの仏教寺院、特に石窟寺院が造営されていたが、その特徴のひとつとして、仏涅槃を題材とした塑像や壁画が盛んに制作されていたことが挙げられる。特に中心柱窟の主室後廊部には、涅槃仏像を中心として、涅槃関連の説話やモチーフが集中的に展開されていたことから、先行研究において「涅槃空間」と呼ばれており、その図像内容や典拠テキストについて緻密な研究が積み重ねられてきた。

しかし、なぜこの地に「涅槃空間」を有する石窟寺院が八〇窟以上も造営されたのか、その根本的な動機と歴史背景については、これまで十分な検討が行われてこなかった。

本発表では、クチャ語（トカラ語B）文献の研究分野において指摘されてきた、クチャの仏教徒たちによる「クチャ」と「クシナガラ」の意図的な関連付けに関する議論を参照しつつ、クチャの仏教石窟寺院の空間構成と図像配置を新たな視点から検討する。特に石窟内における説話図及び人物像の法量の差異と、石窟の礼拝者たちの「視覚的体験」に着目した分析を行う。また、インド仏教の聖地を、インドを中心とする仏教的世界観の「周縁部」に再現しようとする試みは、アジア仏教圏の各地で見られる現象であるが、西域における「聖地の再生産」の問題についても併せて検討したい。

「涅槃空間」が設けられた石窟寺院は、いずれも Vignato/Hiyama (二〇二二)によれば「伝統B」期、すなわちクチャの後期の説一切有部系僧院に属するものであるが、これらはインドのグプタ朝期と重なる時期に造営されたものである。クチャの涅槃美術の特徴を、インドにおける涅槃仏像の展開や、グプタ朝期における聖地表象の隆盛とも関連付けて検討することにより、クチャの後期の説一切有部僧団が重視していた「涅槃空間」の仏教史的意義を新たに捉え直すことを試みたい。

村上勘兵衛文書に見る仏書出版の諸相

京都先端科学大学 金子 貴昭

元和年刊（一六一五〜一六二三）の創業以来、近代まで出版活動を行った京都の板元に、村上勘兵衛がいる。村上の出版書は諸分野にわたるが、寛文八年（一六六八）十二月に、武村市兵衛、山本平左衛門、八尾甚四郎と四軒仲間を結成し、藤田了竹から一〇四点の板木を買収して以降、法華宗門堂を名乗り、日蓮宗書を中心とする仏書の出版活動をメインとした。

村上は、慶応四年（一八六八）から『太政官日誌』の発行を政府から引き受けた他、明治二年（一八六九）には京都第一書籍商社の肝煎を務め、さらには新聞印刷にも事業展開するなど、近世から明治にかけて、出版界に重要な位置を占め続けた。その後、井上治作に事業を譲渡した村上は、東京に移っている。

板元の出版活動に伴い、種々の出版記録が発生する。村上が残した出版記録の一部は、蒔田稻城『京阪書籍商史』（一九二九）に引用されている他、当時の当主であった村上盛信の談話も掲載されている。また、冠賢一『近世日蓮宗出版史研究』（一九八三）も、当時「東京村上家」

にあつた村上家の文書を利用し、日蓮宗書出版における板元・村上勘兵衛の位置づけを行つて
いるなど、出版研究の重要資料として参照されてきた。立正大学日蓮教学研究所編「村上家文
書目録」は、後者に伴つて編まれたと考えられるが、「書状之部」には、村上家関係一五件、板
木譲渡一四七件、蔵版支配二七件、開板七四件、添状三四件、板賃約定五件、本屋板行定一三
件、金子証文一六六件、奉公人請状他一九件、書状二七件、家屋敷譲状一六件、その他一一件
のように、村上家に関わる記録、板元としての活動、仲間に関する資料など、諸記録が幅広く
記載されている。

現在、村上家文書は、京都において個人の所蔵に帰しているが、上述の目録と現存する文書
とを照らし合わせると、目録には掲載されていない文書も多く見受けられ、目録を超える規模
の記録が現存する。本発表では、村上家文書からいくつかの記録を参照することにより、仏書
出版の諸相をたずねる。

仏塔における「古典」意識

―遼金塔にみる模すべき塔のありかた―

金沢大学 水野 さや

本報告における仏塔の「古典」意識とは、既存のある塔を「模すべき対象」と認識し、特定の目的をもってそれに似せた塔が新たに建立される構図、それにより期待された機能のことを指す。例えば、遼寧省朝陽市の方形多層密檐式磚塔（朝陽北塔、朝陽南塔、鳳凰山の大宝塔と雲接寺塔、青峰塔）は、朝陽北塔が隋・文帝の第二回起塔事業による営州梵幢寺塔に由来するため、この塔の姿に正統性を見出した遼代のこの地の人々によつて受容されてきたという指摘があるが、ここで用いる「古典」意識はこれに通じるものである。

第一層塔身に鳥獣座に坐す宝冠如来形像四軀と八大靈塔などを表し、天宮・地宮より多くの經典類を含む納入品が発見された朝陽北塔については早くから言及がある。本報告はこれら先行研究の指摘をもとに、さらなる推察を試みたい。まず、仁寿舍利塔ゆかりの仏塔再建の他

例、朝陽地区の方形多層密檐式十三層磚塔の推移について再確認する。その際、慶州・淨惠寺址十三層石塔などの統一新羅、渤海や高麗の石塔も視野に入れ、一然撰『三国遺事』記載の迦葉仏宴座石、皇龍寺丈六如来立像など、迦葉仏と阿育王を登場させることにより自国仏教の正統性を自認する構図の存在にも注意する。仁寿舍利塔事業において文帝が意識した阿育王に連なる「仏教王としての正統観」、朝陽北塔地宮の石経幢や義県・奉国寺大雄宝殿塑造七仏坐像より遼における過去仏信仰についても指摘される通りであるが、ここに加えて阿育王に直接なぞらえようとする構図も想定したい。

阿育王塔そのもの、仁寿舍利塔そのものの現存例がほぼ皆無な現状においては、その「かたち」に関する言及はあくまでも推測の域を脱し得ない。しかし、その塔のありようを端的に顕在化したものが目視できる「かたち」に反映されているならば、塔の形状と外壁浮彫から導き出すつながりにも、遼金塔のありかたを考えるための重要な手掛かりがあると考えている。